

バーセル大學教授カール・ヨエルは本年三月二十七日生誕七十年を祝され、記念論文集の發刊を見たが、その後間もなく訃報が傳へられた。彼は新しき形而上學の建設に努力する理想主義者として、又特色ある古代哲學史家として知られてゐた。その著「古代哲學史」(第一卷は一九二二年刊行)は終に未刊に終つたものと思はれるが、晩年企圖した大著「世界觀の變遷」は、一九二八年第一卷を終り、第二卷の刊行は生前その最終分冊を殘すのみにまで進捗、最後の一冊も既に脱稿され、フランク・ホエムムによつて本年中には刊行されるとのことである。

二人の有力なるスピノーザ學者カール・ゲーブハルトとスタニスラウス・ドゥニ・ホルコヴスキとが相次いで世を去つた。ゲーブハルト(フランクフルト・アム・マイン)は、最初の完全なるスピノーザ全集の校訂者、「哲學文庫」版スピノーザ著作集の大部分の翻譯者、かのフロイデンタールの「スピノーザの生涯と學說」の完戚者、ハーグの「スピノーザ協會」主事としてその生涯を我が哲學者に捧げた人。「スピノーザ全集」第五卷としてコンメンタールを計畫し本年中に刊行を預告してゐたが、果して完成されたであらうか。獨譯スピノーザ著作集の改修も期待されたが、今は空しといはなければならぬ。彼の死はたゞに「スピノーザ協會」とつてのみならず、全哲學界にとつて代へ難き損失である。

イエスス會員ドゥニ・ホロコヴスキは、一九二〇年「若きスピノーザ」を刊行し、その特色ある解釋によつて知られてゐたが、最近前著を第一卷とする全四冊より成る「スピノーザ」と題する大部の書を企圖し、昨年第一、二卷を出した。

## 新刊紹介

本田義英著 佛典の内相と外相

本書は印度學專攻の本田博士が過去數年來諸種の雜誌或は學會講演に發表せられしものと未發表の論文とを集録せる二十五篇より成る論文集であり、先づ其内容を示せば次の如きものである。

- (一)密友書の研究、(二)龍樹對引正王の問題とその資料に於ける用語に就て、(三)古代印度に於ける普賢信仰の研究、(四)上世大乘經典に於ける陀羅尼、(五)觀音譯語考、(六)觀音古名論、(七)觀音信仰と呪唱還著、(八)Gāṅgadhara と妙音、(九)擬聲語 Gaṅgāra の轉訛と妙音の問題、(十)妙音語義論後記、(十一)經典より觀たる造像の信仰管見、(十二)十如本文に對する疑義、(十三)十如本文論批評に答ふるの資料、(十四)十如本文否定の積極的論料、(十五)法華經史上に於ける龍樹、(十六)後分法華經に於ける二三の問題、(十七)法華經研究の資料、(十八)スタイン氏蒐集西域出土梵本法華經、(十九)カダリック出土法華經梵本三種五品の斷簡に就て、(二十)ファルハードベーク出土梵本法華寶塔品の研究、(二十一)燉煌及高昌本法華度量天地品の解説及其本文比較、(二十二)孟蘭盆經と淨土孟蘭盆經、(二十三)燉煌出土智度論に就て、(二十四)再び燉煌出土智度論に就て、(二十五)燉煌本智度論と現行藏經本との本文異同對校。

以上集録する所の論題に由りて明かなるが如く法華研究に關す

る論稿がその大部分を占めて居るのである。勿論本書が論文集たる關係上、觸れられたる問題は断片的ではあるが、其中に博士の態度乃至立場が充分に看取される。所謂法華宗の解釋は支那日本に於て多少の變遷はあつても、本源は開祖智顛に歸するのであるが、公平に見ればその所説は要するに彼獨自の哲學であつて決して法華經の忠實なる解釋とは見られないのである。而も其據たる羅什譯妙本が既に種々の難點を含んで居る。此點に注意されたる博士は法華經の眞實義を説明せんが爲に、可能なる限り法華經原形の正體を索尋せんとする者である、その結果宗祖の活釋したる法華經に隨順歸依する宗學的立場と批評的立場とを明別し後者の立場を取られるのである。序文に於て博士は佛典を印度學一般の資料として涉臘し公平に觀察する結果佛敎の傳統的解釋殊に護教的解釋を根本的に破斥する結果を招いても止むを得ないと云つて居られるが、此處に批評的立場に立つと云つても決して宗學其ものを批評せんとするものではなく宗學の大高峰を仰察すべく窮子の立場に立つて佛智の高大を仰がんとする立場なる事を本文中に明言されて居る。斯の如き立場より本書中觸れられたる諸問題より二三の例を擧ぐれば次の如きものである。

漢譯梵本を對照し一般信仰界に注意しつゝ、言語學的立場より觀音の原語を推定し、以て過去數千年以來誤讀せられし什譯專門品の「一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫」の訓讀註釋を改め或は專門品尙中觀音威力の具象的顯現十三項の第八「還著於本人」に對する經作者の眞意を尋ねて古來該句の會通に苦しみし語註釋

家の疑問を氷解し、或は妙本方便品十如本文の原典は五種法なる事を妙本と同系の西域本斷簡等より推定し、更に又梵本及び智度論等に基き方便品の尙「是法住法位世間相常住」に對する從來の讀方が原意を失つて居る點を指摘する等、序文に所謂古今の疑問に觸れ或は之を解明した點が見られるのである。十六以下二十一までは法華研究の直接資料で、此中には西域本に就て由來性質或は目錄等が示されて居り、又于闐本が妙本と同一系統なる事が明かにされて居る點は法華經原形研究上特に注意すべきものである。

前述の如き立場を以て書かれし本書であるから漢譯梵本等に對して絶えず本文批評の態度が取られると共に印度一般の思想信仰が注意され、陀羅尼が重要視されるのである。斯くて漢譯註釋家の首肯し難き註釋或は誤釋を部分的に指摘説明すると雖も固よりこれに由つて全部を破斥せんとするものではない。蓋し漢譯經典を全體として味讀し體驗に基いたる宗祖願徳の註釋研究を忽せにしては眞實義の解明に困難だからである。これも一分野を構成して然る可きものであるが絶えず新しき立場に注意を向ける事により一層その解明が深まるものであらう。本書の如き態度は從來の其に比して新しい方面を開拓し行く可きものと思はれ、これに由りて法華經の眞實義が如何に解明せられるかは興味あるものであり本書中所々に述べられし所によつて知られぬでもないが、博士が近く世に問はんとして居られる「法華經論」により多く期待すべきものであらう。(京都弘文堂書房刊行定價金四圓 松尾義海)